

ポローニア

paulownia



絵：「原宿 - 竹下通り」菱沼荘谷（附属大塚特別支援学校 小学部 5 年）

目次

教育長挨拶

巻頭言「もっと自分たちを知ってもらいましょう」

◆宮本信也 2

第 50 回 全日本聾教育研究大会（附属大会）の開催

◆橋本時浩 2

トーマス・バッハ IOC 会長来日記念特別式典 ◆今井二郎 3

共生社会を目指すスポーツ交流とシンポジウムの集い

◆附属学校教育局・普通附属と特別支援との連携推進委員会 4

土の恵みを直接味わう「イモ堀」体験 ◆佐々木昭弘 5

本当の意味での自然な形の交流 ◆吉澤壮一 5

「桐陰祭」中の交流会の存在意義 ◆貴志 泉 5

SGH スタディを締めくくる優秀研究発表会

◆熊田 亘 6

第 2 回 全国 SGH 校生徒成果発表会・

第 5 回 高校生国際 ESD シンポジウム @ 東京 報告

◆建元喜寿 6

チェコで学んだこと（「トビタテ! 留学 JAPAN」に参加して）

◆石井裕志 7

JICA 筑波研修「障がいのある子どものための

授業づくり」を終えて ◆小曾根和子 7

朝永振一郎記念 第 11 回「科学の芽」賞

表彰式・発表会開催 ◆松本末男 8



もっと自分たちを知ってもらいましょう

附属学校教育局長、理事・副学長 宮本信也



SHINYA
MIYAMOTO

国立大学附属学校国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議（有識者会議）が、平成28年9月から継続して開催されています。この会議での議論を待つまでもなく、国立大学附属学校については、その役割や活用方向さらには存在意義まで、繰り返し議論がされてきています。

そうした議論内容を見ますと、指摘されているよりは活動していると思われる部分もありますし、指摘されるような問題の検討が早急に必要と思われる部分もあるように感じます。このずれは、認識の違いという点もありますが、附属学校で何をしているのか周りからよく見えないという点もあるように感じています。

第4回有識者会議でも、附属学校のアピール力の不足が指摘されています。私たちは、もっと附属学校のことを知っていただく活動や努力を考えなければいけないのではないのでしょうか。その際、自慢できる活動をアピールするだけでなく、これからの対応が必要な課題などについても併せて示すことで、私たちが提供する情報への信頼度が大きくなると思います。そして、そうした情報提供姿勢の維持は、私たち自身が自分たちのことを常に点検していなければいけないと思われまます。

自分たちを適切に理解していただくためにこそ、私たちは自分たちを批判的に見つめる眼を養うことが必要のように感じています。

第50回 全日本聾教育研究大会(附属大会)の開催

附属聴覚特別支援学校 主幹教諭
(第50回全日本聾教育研究大会(附属大会)事務局長)

橋本時浩



平成28年10月13日～14日、第50回全日本聾教育研究大会（附属大会）が、附属聴覚特別支援学校を主管校として開催されました。第50回の節目となった今大会では、「聴覚障害教育の専門性のさらなる追求と共有」を大会主題とし、齋藤佐和筑波大学名誉教授、四日市市章筑波大学名誉教授による基調講演と、幼稚部、小学部、中学部、高等部普通科、高等部専攻科、寄宿舎での授業研究分科会や教育テーマ別に分かれた研究協議分科会が行われました。全国の聴覚障害教育に関わる約700名が参加し、研究発表も106件を数えました。

1日目午後からの開会式には秋篠宮妃殿下並びに眞子内親王殿下のご臨席を賜り、妃殿下からは手話でお言葉を頂戴いたしました。会場が厳粛かつ華やいだ空気に包まれたことは言うに及びません。

本校では、普段から実践している授業を見ていただくことに主眼を注ぎ、指導力向上のための授業実践の研究に取り組ん

できました。そのなかで、乳幼・幼稚部は「話し合い活動」、小学部（低・高学年とも）は「教科指導」、中学部は「思考力」、高等部普通科は「主体性や探求心」、高等部専攻科は「確かな知識」、寄宿舎は「社会自立」に焦点を当てた研究テーマを設定し、何度も授業研究会や検討会を行いながら、授業の組立や指導力についてブラッシュアップを図りました。大会期間中の授業研究協議会では、たくさんのご意見をいただきましたが、本校にとっても今後の授業の在り方を考える上で大変貴重な機会となりました。また、研究協議分科会は14分科会（分散会をあわせると15分科会）を設定しましたが、各分科会での活発な意見交換も今後の大会に向けての財産となりました。

これまで聴覚障害教育が築き上げてきた「専門性」と、社会や時代の変化にともなって見えてきた新たな役割や課題を共有することができ、今後の教育現場の実践に向けて大きな成果をあげることができました。



トーマス・バッハIOC会長 来日記念特別式典

附属学校教育局教育長 特命補佐 今井二郎

平成28年10月20日、文京校舎において、トーマス・バッハIOC会長来日記念特別式典が開催され、会場には300名を超える関係者が集まりました。これは、筑波大学つくば国際スポーツアカデミー（TIAS）が、文部科学省・スポーツ庁・文化庁の主催する「スポーツ・文化・ワールド・フォーラム」の趣旨に賛同し、公式サイドイベント「TIASスポーツカンファレンス ～スポーツと教育の力～」(10月19日・20日)の一環として実施されたものです。

トーマス・バッハIOC会長の来日記念特別式典では、本学永田学長より筑波大学名誉博士号がバッハ会長に授与された後、来賓の森喜朗氏（東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会会長）、竹田恆和氏（JOC会長）、小池百合子氏（東京都知事）、鈴木大地氏（スポーツ庁長官）より挨拶と祝辞がありました。

引き続き行われたバッハIOC会長の特別レクチャーでは、「オリンピックの価値～スポーツと教育の役割～」と題し、日本人で初めて国際オリンピック委員となった東京高等師範学校長であった嘉納治五郎は、クーベルタン男爵と同様、スポーツを教育に欠かせないものと認識していた教育者として称え、また筑波大学がクーベルタン、嘉納両氏が持ち続けたオリンピズムの理想を継承し続けていることが紹介されました。さらに、筑波大学附属学校が国際平和教育としてのオリンピック教育を特別支援学校も含めて活動されていることも取り上げられました。

会場には、附属学校の高校生と特別支援学校高等部生徒13名が招待され、バッハIOC会長の特別レクチャーを熱心に聞き入っていました。レクチャーを聴いた附属学校の生徒からは、「来賓や参加者の顔ぶれがすごく、バッハ会長の影響力の大きさがわかった」「中学の頃から耳にしていた嘉納治五郎の名前を登壇した方々全員が口にしていた、嘉納治五郎の偉大さがよくわかった」などの声があり、東京パラリンピックを目指しているという特別支援学校高等部生徒からは「バッハ会長が東京パラリンピックについて話されたのがよかった」との感想もありました。



この特別式典の前日10月19日の午後、学校訪問セッションが行われ、ウ・チンクオIOC理事、セルミヤン・ウンIOC理事、IOC職員が附属大塚特別支援学校を訪問しました。同校体育館では、附属大塚の中学部と高等部の生徒、附属坂戸高等学校の生徒、TIAS海外留学生が、ベルトにつけた2本のタグを取り合う「タグ柔道」と、キンボールを使ったチーム戦のおにごっこ「おにボール」のゲームに参加しました。これらのゲームは附属大塚特別支援学校で開発されたもので、附属坂戸高校生徒やTIAS海外留学生とのゲームに参加した附属大塚特別支援学校の生徒からは、「おにボールが好き。ボールを転がすのが楽しい。スポーツをするのはうれしい」という感想が寄せられました。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、筑波大学と附属学校に寄せられる期待の大きさを実感した2日間でした。



共生社会を目指すスポーツ交流とシンポジウムの集い

附属学校教育局・普通附属と特別支援との連携推進委員会

2016年12月10日に「共生社会を目指すスポーツ交流とシンポジウムの集い」が、筑波大学附属中学校・附属高等学校を会場に開催されました。本企画は、平成28年度文部科学省委託事業「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解（心のバリアフリー）の推進事業」の一環として開催され、本学附属学校の児童生徒や一般の方を含む関係者約180名が参加しました。

【スポーツ交流】10:00～12:00

A: ボッチャ交流（リオパラリンピック日本代表高橋和樹選手と一緒にボッチャをしよう）

B: アダプテッドスポーツ交流（楽しみ方はアレンジ次第。レッツエンジョイスports）



ボッチャ：高橋選手の指導で



風船シッティングバレー



クワッドゴールボール

ボッチャ交流では、高橋選手によるデモンストレーションが行われ、参加者は、正確な投球に目が釘付けになり、ボールの行方を見ては驚きの声を上げていました。また、高橋選手からの実践的なアドバイスにより、参加者はボッチャの奥深さを実感することができました。

アダプテッドスポーツ交流では、風船シッティングバレーを全員で行い、その後、附属坂戸高等学校の生徒が考案した「クワッドゴールボール」等6つのアダプテッドスポーツをスタンプリー形式で体験しました。障害のある方を含む幅広い年齢層の参加者が一緒にスポーツを体験する機会となりました。

【講演】13:00～14:30

「障がいを持って変わった自分の生き方
～マッシュルームの世界への挑戦～」

講師：高橋和樹 選手

2016 リオパラリンピックボッチャ日本代表
（NPO 法人自立生活センターくれぱす所属）



高橋選手からは、高校2年生まで柔道に熱中し、練習中の事故で障がいを持ち、その後日本代表選手を目指してボッチャに取り組んだことが語られ、障がい者アスリートの実体験として、「カッコいい生き方をしよう」というメッセージをいただきました。その話に、児童生徒のみならず多くの参加者が感動しました。質疑応答では、一人暮らしを始めたときのことやリオパラリンピックの選手村での生活などについても質問が寄せられ、高橋選手にはどの質問にも丁寧に答えていただきました。

【シンポジウム】15:00～16:30

「いろいろな人とともに生きるということ
～共同生活体験とスポーツ交流を通して～」

コーディネーター：教育局次長松本末男

シンポジスト：筑波大学附属学校生

附属学校5校の児童生徒がシンポジストとして、『黒姫高原共同生活体験から得られたもの』と午前の部で行われた『スポーツ交流の感想』を発表しました。「他校の生徒・小学生・他の障害をもった人たちにも、自分から話しかけることができました（聴覚）」『どんどん仲間が増えて嬉しかった（小学校）』「僕は黒姫高原共同生活から、楽しさを共有する喜びを学んだ（駒場）」『楽しかったのは、川に入ったこと、ナウマン象、カレーづくり、キャンドルファイヤー、バスレク／手話ができた／おにいさん、おねえさんと一緒にうれしかった（大塚）』「相手のことを考えて、一緒にできる方法を工夫すれば、だれでもできる（桐が丘）」との発言に、皆が聞き入りました。

今回のスポーツ交流とシンポジウムを通して、参加者それぞれが「共生社会」について考えを深める機会となりました。そして、交流は益々続きます。



シンポジストの児童生徒



土の恵みを直接味わう“イモ堀”体験

附属小学校 教諭 佐々木昭弘

東京都西東京市にある「筑波大学附属小学校保谷園教場」では、毎年1年生から6年生までの全校生が、サツマイモ苗差し（5月）、ジャガイモ掘り（6月）、そしてサツマイモ掘り（10月）の活動をしています。

土に直接触れながらのイモ掘りはもちろんですが、「カレーライスづくり」や「焼きイモ」等、収穫したイモをその場で調理し、自然を味わう活動もしています。また、本校児童だけではなく特別支援学校との交流授業の場としても活用しています。

昨年の3月には、後援会からのご寄付のおかげで、子どもたちの着替え、授業、雨天時の活動の場として活用している教場を建て替えることができました。調理場も新しく設置され、より

子どもたちが安全に、かつ楽しく活動できるようになりました。これからも、土に触れる活動を大切にし、継続した価値ある活動にしていきたいと思っています。



本当の意味での自然な形の交流

附属中学校 教諭 吉澤壮一

視覚特別支援学校との交流会は随分と前から行われていましたが、現在のように委員会主導の形になったのは平成15年度からです。毎年任命された生徒達が、視覚特別支援学校の生徒会と何度も話し合い、案を出し合って、年に2回開催しています。内容はその年により違い、トークによる交流を主とする

年もあれば、ゴールボールやフロアバレーなどの競技をオリジナルに変えて行う年もあります。1つのゲームを作るにも多面的な発想が求められ、初めは頼りなかった生徒も一年後には合理的な配慮が自然

と出来るまでに成長します。自らで出来る事と出来ないことを理解し、出来る範囲で手を差し伸べる本当の意味での自然な交流が特徴です。トークや競技を通して自分を取り巻く環境の中での常識を打ち破られ、お互いに人間としての視野が広がるいい機会となっているようです。その結果、本校では参加は自由ですが、参加者のリピート率は非常に高い行事となっています。



「桐陰祭」の中の交流会の存在意義

附属高等学校交流委員会指導教諭 貴志 泉

2013年から本校文化祭「桐陰祭」において、本校交流委員と附属大塚特別支援学校中等部との交流会が行われています。今年度で4回目を迎えました。内容的には、教室を利用して、大塚の中学生が作成した作品を展示し、一部販売もしています。販売は大塚の中学生と本校生徒が担当しています。私事ですが、昨年度購入した益子焼風の厚手のお皿は家で活躍しています。

もう一つの交流は楽器演奏と合唱。昨年度は「BELIEVE」を合唱し、スーパーエイサーを踊り練り歩きました。今年度は合奏「BELIEVE」それから「BELIEVE」「海の声」の合唱。公演が終

わってからは大塚の生徒と一緒に桐陰祭を楽しみました。ちょっとした食べ物を買ったり、水風船をもらってきたり。大塚の生徒の笑顔が高校生に与える影響は計り知れないものがあると信じています。大好きな歌「BELIEVE」の歌詞にある「いま未来の扉を開けるととき」「I believe in future 信じてる」この交流の存在が高校生に与えるものは大きい。



SGHスタディを締めくくる 優秀研究発表会

附属高等学校 教諭 熊田 亘



本校のSGHに関わる2つの柱のうちのひとつであるSGHスタディ（課題研究）の第1期が終わりました。これは、現3年生が1年半という長期に渡って取り組んできたものです。一昨年4月から始まったこのSGHスタディは、論文提出、校内最終報告会を経て、SGH指導委員の先生ほか来賓の方々をお招きしての優秀研究発表会（9月17日）によって締めくくられました。

3年生全員が集まったこの優秀研究発表会では、本校全教員により選出された優秀な研究グループが表彰され、その中でも特に優れていると評価された最優秀賞・優秀賞受賞計4グループのプレゼンテーションがありました。発表グループの研究課題は以下の通りです。

最優秀賞：「文京区ハザードマップを改善せよ」

優秀賞：

「東京オリンピックを見据えたインフォメーションアプリの開発」

「日本に対するイメージを元に日本の良さを伝える」

「性教育から考える同性愛への認識」

いずれの研究も、文献にあたるだけでなくアンケート・インタビューなどで1次データを集め、アウトプットも論文にとどまらず、スマホのアプリや動画など問題解決のための具体的提案をしている点が注目されました。

プレゼンテーションを聴いていた3年生との質疑応答の後には、指導委員の先生方から温かくかつ鋭い御講評をいただき、発表した生徒たちはもとより、聴衆として参

加した生徒も大きな感銘を受けた様子でした。現2年生は、このような3年生の成果も参考にしつつ、現在、課題研究に取り組んでいるところです。



第2回 全国SGH校生徒 成果発表会・ 第5回高校生国際ESD シンポジウム@東京 報告

附属坂戸高等学校 教諭 建元喜寿



平成28年11月10日、筑波大学東京キャンパスを会場に、「第2回全国SGH校生徒成果発表会・第5回高校生国際ESDシンポジウム@東京」を本校が主催して開催しました。午前中は、第5回高校生国際ESDシンポジウムを開催しました。国際連携協定を結んでいるインドネシア環境林業省附属高等学校、ボゴール農科大学附属コルニタ高校、フィリピン大学附属高等学校、そしてタイ・カセサート大学附属高等学校から各校のESDに関する活動報告を行いました。本年度は新たにSGH指定校である東京学芸大学附属国際中等教育学校の皆さんにも口頭発表をお願いしました。

午後は、第2回全国SGH校生徒成果発表会を開催。北海道から沖縄まで全国から参加があり、海外校もいけると40校もの参加がありました。各校の課題研究活動の成果をもちよりポスターで発表を行いました。本年度は統一テーマを「SDGs and High School Students -17 goals to change our world- ～SDGsと高校生:17の開発目標から創造する私たちの未来～」とし、各校の課題研究活動が、SDGsの17の目標のどれにあたるかを各校のポスターに提示してもらい、テーマの明確化と統一化をはかりました。

会場となった教室は満席となり補助席を出すほどの盛況で、熱心な議論が交わされました。進行はすべて英語で行われました。今回、JICA国際協力機構のブースを作り、フィリピンゾーンやタイゾーンなど、本校の連携校と他のSGH校の皆さんが交流を深められるような工夫も行いました。本校の国際教育活動では「オープンプラットフォームスクール」を掲げています。本校がハブとなり多くの人が出会い学びあえる場を提供できればと考えています。来年も11月上旬に開催予定です。国内外の高校生が学びあえる場を今後とも提供していきたいと思います。



チェコで学んだこと (「トビタテ! 留学JAPAN」に参加して)

附属視覚特別支援学校 副校長 石井裕志



ホストファミリーと一緒に

本校の高等部普通科2年青木悠弥君と渡辺麻姫さんが「トビタテ! 留学JAPAN」でチェコ共和国のリベレツでホームステイをしながら、特別支援教育やインクルーシブ教育について学んで来ました。リベレツは首都プラハから車で1時間ほどの距離にあり、チェコで6番目に人口の多い都市です。リベレツには視覚特別支援学校は無く、視覚障害がある児童生徒は、近隣の普通校に通い、視覚支援センターが支援しています。ちなみにチェコでインクルーシブ教育が始まったのは昨年からです。

留学プログラムの内容は以下の通りです。

- ・リベレツ特別支援学校での交流 (日本の文化紹介・高校生の日常紹介、英語・社会の授業参加、心のケアを目的とした「リラクゼーションルーム」体験)
- ・インクルーシブ教育を実践しているトゥルノフ小中高等学校での授業参加と発表
- ・カレル大学 (日本学科) での授業参加及びリベレツ工科大学での3Dプリンター研究の見学
- ・プラハ視覚特別支援学校とイエジェク特別支援学校での授業などへの参加

この留学を通して、二人が感じたことを、それぞれ簡単に紹介します。

「留学前は、チェコのインクルーシブ教育は必ず同一の場所で学べる教育だと思っていましたが、ニーズによってはインクルーシブ教育が十分ではないケースもあるかもしれないと思うようになりました。日本でも特別支援学校と連携し、誰でも普通校に通うことが困難ではない環境になれば良いと思うとともに、将来教員となり、そういった環境作りに貢献したいと思いました。(青木悠弥)」

「現地でのやりとりはほとんど英語でしたが、ホストファミリーのお母さんの英語は片言で、お父さんは全く話せませんでした。しかし最後には、お母さんとは日常会話だけでなくジョークなども言い合えるようになり、お父さんも挨拶を英語でしてくれるようになりました。私も積極的にコミュニケーションをとるようにしましたが、ホストファミリーが私を障害者だからとか、外国人だからというバリアを張らずに接してくれたおかげで、ホームステイ先での生活は忘れられないものになりました。(渡辺麻姫)」

JICA筑波研修「障がいのある子どものための授業づくり」を終えて

特別支援教育研究センター 小曾根和子

11月24日(木)～12月16日(金)に、JICA筑波からの委託を受け、アフリカ及びオセアニア地域8カ国から11名の研修員を迎えて、課題別研修「障がいのある子どものための授業づくり」を行いました。今回は「授業づくり」として個別の指導計画と授業案、教材の工夫とその活用、インクルーシブ教育に焦点を当て、附属特別支援学校5校の参観、大学教員と附属学校教諭による講義とワークショップ等を通して研修を行いました。

研修員の皆さんはとても熱心で、附属特別支援学校と守谷市公立小学校の参観や講義では、毎回、教室環境から授業内容、教材、子どもの様子など、様々な面から積極的な質問や意見交換がありました。ワークショップでは、二日間かけて当センターの教材・指導法データベース(英語版)(<http://gakko.rdy.jp/kdb/en/>)での教材検索、教材作成、これらの教材を参考にした授業案作成、ディスカッションを行いました。多くの研修員が、日本の特別支援教育から学んでぜひ自国に活かしたいこととして、身近な素材で教材を工夫する創造性、子ども一人ひとりの実態に応じたきめ細やかな教材の工夫、携わる教

員の熱心な姿勢、を取り上げていました。二日間の成果は12月3日(土)のセンター主催セミナーで発表してもらい、私達にとっては教材・指導法データベースの海外発信を進めていく上での検討課題を得る良い機会になりました。研修最終日にはJICA筑波で成果報告会が行われ、研修員一人ひとりから、3週間の研修内容を自国の課題や実状に応じて盛り込んだ事業計画が報告されました。また、多くのことを楽しく学んだ、指導案に従って授業が行われている様子を参観できてよかった、などの感想が寄せられました。

研修を終えて、国際教育支援の一翼を担うことが多少はできたのかな、と安堵しています。今回の気づきや反省をいかして、今後も国際教育支援事業に取り組んでいきたいと思います。





朝永振一郎記念 第11回 「科学の芽」賞表彰式・発表会開催

附属学校教育局 次長 松本末男

12月17日(土)、本学大学会館において、朝永振一郎記念第11回「科学の芽」賞の表彰式・発表会を開催しました。

「科学の芽」賞は、筑波大学にゆかりのあるノーベル物理学賞受賞者の朝永振一郎博士の功績を称え、それを後続の若い世代に伝えていくとともに、小・中・高校生を対象に自然や科学への関心と芽を育てることを目的としたコンクールです。

今回、国内の学校 200校及び海外 6か国 8校(中国、大韓民国、タイ、ハンガリー、インド、イラン)の日本人学校から小・中・高校生部門合わせて2,919件の応募がありました。その中から小学生部門10件、中学生部門8件、高校生部門3件の合計21件の作品(うち団体作品2件含む。)を極めて優秀と認め、「科学の芽」賞を授与しました。

表彰式・発表会には、受賞者26名が出席されました。そのほかにも受賞者のご家族や学校で指導いただいた先生方など多数の方々も出席されました。

本学からは、永田恭介学長をはじめ、三明康郎副学長、西川博昭副学長、宮本信也副学長、金保安則大学執行役員、池田潤学長補佐室長、伊藤雅英数理物質系長、松本宏生命環境系長及び「科学の芽」賞実行委員会委員などが出席し、総勢で100名を超える出席者となりました。

表彰式は、「科学の芽」賞実行委員会副委員長である松本末男附属学校教育局次長の開会の挨拶で始まり、次に永田学長から各受賞者に表彰状と記念の楯の授与と祝辞がありました。続いて、部門毎に受賞者の発表会と審査に携わった附属学校教員及び大学教員による作品の講評が行われました。発表会では、受賞者達がスクリーンに作品の概要を投影しながら研究の成果を報告したり、司会者からの質問に自信をもって、嬉しそうに受け答えをしたりしていました。

最後に「科学の芽」賞実行委員会委員長の宮本副学長の総評があり、その後、同会館のレストランにおいて懇談を催しました。懇談では受賞者のご家族や、副学長からも感想をいただき、終始和やかな表彰式・発表会となりました。

ご応募いただいた皆様、関係者各位に深く感謝を申し上げますとともに、来年度の「科学の芽」賞もどうぞよろしくお願いいたします。



●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia

vol.38

発行日……平成29(2017)年2月28日

発行者……附属学校教育局教育長 宮本信也

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・パルーン

印刷……広研印刷 使用紙:U-Itimax [日本製紙]

